

平成 19 年度第 1 回「海上の森運営協議会」会議録要旨

日時

平成 19 年 8 月 2 日（木） 13：00～14：45

場所

自治センター 5 階 研修室

出席者

井桁正人委員 内田臣一委員 加藤倫教委員 木村光伸委員 鈴木敏明委員 芹沢俊介委員
竹中千里委員 只木良也委員 長江順造委員 松尾 初委員 マリ・クリスティーヌ委員
（50 音順）

欠席者

酒井立子委員

傍聴者 0 名

1. あいさつ

竹中 千里座長（名古屋大学大学院生命農学研究科教授）

伊藤 明氏（農林水産部農林基盤担当局長）

2. 議事

（1）平成 18 年度及び 19 年度の取組について

座長

・まず、議題 1 の平成 18 年度及び 19 年度の取組について、事務局からご説明をお願いしたい。

事務局

議題 1「平成 18 年度及び 19 年度の取組について」説明

座長

・アンケート調査を見ると、年齢の分布で 10 代、10 代未満が非常に少ないが、これはアンケート調査してくれた人がこれだけということで、実際にはもうちょっと来てくれているのか。

事務局

・印象的には、かなり小学生の方も多くご来場いただいている。おそらく、アンケートをされ

た方のものが主にできてきているので、そのような傾向あるのではないかと思う。ただ、平日等は、やはり60代くらいのかたとお孫さんが来られるというパターンが比較的によく見られた。

座長

・子供向けの図書が欲しいというのが50%に近いので、何か矛盾していると思ったのだが、これはお子さんを連れてこられた親御さんがそのように書いてくださったということですね。

委員

・今年の計画として、案内板・標識を要所に設置されるという話だったが、それは県の予算を使って、業者に依頼されて行われる予定なのか。

事務局

・今年付けるのは簡単な標柱、25センチぐらいの丸太の上のほうに矢印を付けたもので、業者につくっていただいたが、それほど立派なものではなく、簡単なものになっている。

委員

・業者に依頼されるのも良いかもしれないが、保全活動を行う中で自主的に参加していただいて、海上の森の中の間伐材などを使って、看板や標識を作る活動をして良いかと思う。

・自主活動としてやっている例はたくさんあるので、参加していただける方もたくさんいるのではないかと思う。そういうことも、市民参加でやっていただいても良いのではないかと感じた。

事務局

・おっしゃるとおりで、簡易なものについては、私どもが自前で作ったり、そういった呼びかけをして、一緒につくっていくことも考えていきたい。

・今年、ムササビの調査を行うが、設置されている巣箱がもう駄目になっていて、新しく巣箱を20個くらいつくる予定をしている。これについては、市民参加という形を得ながらやっていこうと考えている。

委員

・海上の森の体感ユニバーサルプログラムで扱っているのは、体に障害がある人の対応のような話に聞いたが、もう少し一般的な、いわゆる森林療法的なフォレストセラピーなどの方面の動きは考えてはいるのか。

・今、林野庁は大体そちらの方へ一生懸命向いているので、そこに県も乗ってやるというのが、ある意味ではプラスになるかもしれない。やはり一つの動きだと思うので、セラピーはいかなものか。

事務局

・今回は、障害をお持ちの方でも参加できるプログラムの開発だが、セラピーといった面から

も、プログラムに組み込んで、必ずしも身障者の方だけのものではなく、一般の方も使えるようなプログラムをつくっていきたいと考えている。

座長

・森林セラピーという言葉は、林野庁がやっている認定を受けないと使ってはいけないのではたか。

事務局

・セラピー基地、セラピーロードについては、国土緑化推進機構から認定されたところが全国に数カ所あり、そういう形をとることに対しては、セラピー基地の認定、セラピーロードとしての認定という形になるかと思われる。しかし、森林セラピーという言葉に対してはフリーな言葉だと思う。

座長

・では、前向きにセラピーという言葉も考えつつやっていただきたいということで。他に何か。

委員

・取組状況に竹林整備というのがあるが、森林育成事業の人工林整備や広葉樹林の整備では竹をつぶそうと、それから、里山保全事業は竹林整備で竹林を生かして使おうということだと理解してよろしいか。

事務局

・そういうことです。ただ、海上の森では、竹林そのものはそれほど多くないので、昔から竹林であったところについては竹林として保全していきたいと考えている。

委員

・今のところ、海上ではあまり問題になっていないかもしれないが、竹の侵入問題はだいぶ気をつけておかないと、具体的な面でいろいろな障害が起こってくるかと思うので、よろしくお願いしたい。

委員

・今日も実はこれから環境部へ行って打合せをしてこようと思っているが、海上にスミレサイシンという植物があり、竹林の中に生えている。それで、竹が問題になるのは何かというと、そこへタケノコ掘りがどさどさ入るとのこと。みんなほじくり返して土をかけるものだから、非常に危機的になってしまい、どうしようかという話を今している。

委員

・今タケノコを掘るのは無制限なのか。そんな地域なのにそれは良いのか。

委員

・一応、自然環境保全地域ではあるのだが、従来どおりの里山利用については、特に制限はないという基本方針だったはずなのですが、度が過ぎて、ここ2～3年非常に激しい。

委員

・タケノコ掘りとイノシシと区別はつくのか。今タケノコ採りに行っても、もうタケノコがないとみんなが嘆くぐらいイノシシが荒らしているの、そちらも含めて規制をしないと。

委員

・それは確かにお話のとおりで、まず柵を張ってみようかと。イノシシには柵は効果がなく、人間なら、ある程度柵があれば、注意してくれと言え、それでもやる人は少ないだろうと。効果がなければ、イノシシ対策を考えようということ。

・ある程度タケノコを掘って、竹が広がるのを防いでもらうこと自体は決して悪いことではないと思うのですが。

委員

・愛知県のいろいろな所でぼうぼう竹が生えているところが多いので、逆に海上の森では今言われたタケノコ掘りをしてもら。けれども、規則みたいなものを作って、ここは掘ってもいいですよというサインがあったり、また、1本のタケノコを掘った場合、ただ持って行くだけでなく、例えば3本竹を切って帰ってくださいとか、なにか自分もそこに還元したりしていくような仕組みをつくってみてはどうか。

・単に人のところにどかどか入ってきて掘って帰ってしまうとか、そのままにしておくということではないような体験があると面白いかなと思う。

座長

・竹林整備に関しては、周りの里山の見本になるような整備や管理の仕方をやっていただきたい。

委員

・企業との連携とあるが、土日については好きな方がみえるが、やはり環境教育といった立場で見ると、企業の教育の場として平日にそれを使えるということもあるので、そういったところを考えていくとよりよいかなと思う。

・CO₂の問題がいろいろ出されているが、その問題で森林がどれくらいCO₂を固定しているのか、排出しているのか、あまり明確になっていない。海上の森ではどれくらいCO₂を固定しているか、人工林の整備をしたら成長がどういうふうに変ったか、固定の問題に絡めてそういったことをやっていく。そういったものの普及というか、きちんとした理解が必要なのかなと思う。

・今、エコロジーという言葉がどこにでも出てくるが、なにか違った意味にどんどん変わって行ってしまって、私は何か嫌な感覚を受けているが、その辺を正確に伝えることも必要なのでは

はないかと思う。

・森林整備で間伐などをする。そうすると、成長量などがわかるようになってくるということから考えていくと、そういったものを利用しながらやっていけないかなと思う。それも調査を市民の方に実施していただく。とことんいろいろなことに利用したのなら、そのデータを取って公表して、普及させていくことが必要なのではないかと思う。

委員

・海上の森の二酸化炭素吸収・吸着の問題は、この地の万博計画のときに、アセスメントとして推定されていて、50メートルメッシュの平面図としても図化されている。

・間伐をやったから吸収量が多くなるというのはうそで、それは私もいろいろな所でアピールしている。参加意識をあげるために間伐との絡み、手入れということになっている。

・具体的に生産生態学的にどちらが大きいかと言ったら、間伐しない方が吸着するので、痛しかゆしの苦しいところだと思う。

委員

・いろんな面が見方によってあるので、そういったことも含めて、正確にものを伝えるということが大切になるかと思う。

委員

・それからおっしゃるとおり、エコロジーと片仮名で書くのと生態学とでは、今、全然違った意味になってきている。

委員

・そういったことは、見えるようにしていかないといけないと思う。

・林業分野でもそうだが、ここの地位の所はこういう成長曲線がありますよということが作られている。そういったことを含めて分かるような形で、こういうふうに調査して、こういう状況なのだとして正確に伝えるというのが大事かと思う。

座長

・いろいろあるが、環境教育の場として、正しい情報が発信できるような検討等をお願いしたいと思う。

事務局

・来年度から調査の中で、森林のモニタリング調査も導入していきたいと思っているので、長期的な視点で5年おきぐらいにモニタリング調査をやって、その結果などをまとめて、また公表なり展示なりさせていただきたいと思っている。

(2) あいち海上の森大学及び国際フォーラムについて

座長

- ・次は、海上の森大学及び国際フォーラムについて、事務局から説明をお願いしたい。

事務局

「あいち海上の森大学及び国際フォーラムについて」説明

委員

- ・今、10日余り過ぎたが、その応募状況は。最近どれくらい来ているか、もし分かったら。

事務局

- ・問い合わせは何件かあったが、まだ応募された方はおられない状況です。

委員

・あいち海上の森大学の説明のときに、万博の剰余金が少しあるという。これにほとんどつぎ込んでしまうのか。それとも、もう少し項目別に運用が可能なものなのか。

事務局

・愛知県全体で割り当てがあり、海上の森の関係については、あいち海上の森大学の開校と国際フォーラムの二つで、今年度については八草からセンターまでの小径の整備費用も剰余金でやっていく。小径については単年度で終わりになる。

委員

- ・予算規模はどの程度か。

事務局

- ・全体で2億円。大学とフォーラムでいくと、単年度で1600万円ぐらいの事業費になる。

委員

・せっかく大学という形で講座を募集されるが、PRがやはり大事であると思う。その辺はいかがか。

事務局

・なかなかPRができていない部分がある。今チラシも作り、いろいろな所に配布して、募集の呼びかけをしたいと思っている。8月の「広報あいち」には載せていただけるようになっている。瀬戸市内にある新聞社の支局などに出向き、記事掲載をお願いしていきたいとも思っている。

委員

・相当頑張らないと人が集まってこないのではないかと危惧している。例えば、3人とか5人とかしか来なくて、しょうがないから県の職員が10人ほど余分に来ているとか、そういう形

でつじつま合わせをすると、先ほどの千何百万円というのがものすごくもったいないと思う。その辺が少し心配。

事務局

・確かにそういうことで、これからいろいろな所に直接声掛けをして、一人でも多くご参加いただけるように頑張っていきたいと思っている。

委員

・海上の森大学と、指導者養成講座、それから、人と自然の共生国際フォーラムのそれぞれの想定されている対象の人というのはどのようになっているのか。

事務局

・指導者養成講座については、海上の森でいろいろな体験学習の指導ができる方ということで、身近な自然について、解説なり、知識を伝達できる人を養成していきたいと思っている。

・海上の森大学はもう少し幅広く活動していただければいい方ということで、知識もある程度ある方を対象に、主には行政の担当者であったり教育関係者であったり、企業の方でもそういった方面に関わっている方とかを対象に考えている。ここで学んでいただいたことについては、何らかの形で、それぞれの分野で実践につなげていただく方を養成していきたいと思っている。

・国際フォーラムについては、知識とか見識を深めていただくということで、どちらかというところと一般向けということで考えている。

委員

・大学の講座を受けた方のメリットというのは、どのように強調されるのか。知識を増やすだけであると、何か少ないような気がする。

事務局

・修了証書や認定書はお渡しするが、それによって公的な資格が得られるのではないので、そういった面のメリットはないが、一流の先生方の講義が受けられるだけでもかなりのメリットではないかと思っている。

委員

・海上の森大学をどうしてもやるということであれば現地実習を兼ねた講演会も組み込んでほしい。我々から見ると一億六千万円という想像だにできない多額の予算の執行を海上再生に是非とも役立ててほしい。都心部で使い切るのではなく海上の里で使ってほしい。移動講習を行えばよい。たとえば崩れた畦への石積みなど昔の知恵と技術をもった名工を講師にすればよい。そうすれば荒れた海上の里は蘇る。

・この講習参加者が一過性の活動に終わらせないために参加者の雇用も考えると良い。

・外国人留学生5人とあるがもったいない。長期的な交流の取り組み方を視野に入れるべきだ。そうすれば、この環境大学の意味はある。そのような経験もある。

座長

・やはり PR が重要で、ここの委員の先生方にはぜひ周囲の方に PR していただいて、初年度、良い成果が出るようにできればと思う。

委員

・今海上では関係機関の斡旋で地権者達が狩猟免許を取得しようという動きがある。イノシシ被害は深刻であり駆除の必要もある。従来、海上ではシシ脅しや落とし穴、また住民の飼っていた放し飼いの犬によって今日の様な被害は経験していなかったという記憶がある。ただ動物を敵とした人間中心の考えも行き過ぎれば問題となる。

事務局

・今、イノシシの関係については、相当のところはかなり出没していて、地元の方が作っておられる農作物なども一夜にして全滅という状況がある。そのため、今、海上の森の会と県の協働で柵を巡らしている。メッシュの網を6割ぐらい囲ったので、直接的な被害は若干少なくなってきたと思うが、まだ全部は囲いを終えていないため、悪戦苦闘している。

委員

・イノシシ側も進化している。

(3) 平成20年度の主な取組事業(案)について

事務局

「平成20年度の主な取組事業(案)について」説明

委員

・センターが海上地区の利用者の統計というものをぜひとっていただきたい。人の入り込み数がある程度把握しておいていただきたいと思う。海上の今後の活用を考える上で、一番基礎的な資料になるのではないかと思う。

・調査研究があるが、あいまいな情報をいくらたくさん集めても、ある意味では自然を踏み荒らすだけのことで、着実な、正確な情報をきちんと蓄積していただきたい。

・調査して調査報告書が出て、報告書で紙資源を浪費し、湿地を踏み荒らし、自然環境破壊に貢献しただけというのがよくあるので、そうならないように注意をお願いしたい。

委員

・調査の中で、センターに来られている7割の方々が車で来ているとのことだが、先ほどのCO2の話もあり、せっかくリニアモーターカーが万博のときにできたのに使われていないということがとても残念。本来なら、またバスに乗って海上の森センターに来られるような環境づくりが大事だと思う。

・海上の森は瀬戸市でもあるわけなので、やはり地域づくりやまちづくりを考えるときに、瀬

戸市と一緒にやっていくということもすごく大事だと思う。

・今度、瀬戸市が天水皿の所に公園整備をされ、そこで一番大きな障害物になっているのが愛工大の敷地のフェンス。万博の一つの理念を継承していくための場所でもあるので、もしできるならば、愛工大と瀬戸市と一緒にあって、それで一体感というものを海上の森と一緒に味わえるような空間作りを、地域のために、連携してまちづくりに対しての参加を考えていただけると良いのではないかと思います。

委員

・実は車でこういう所に来るときの最大のデメリットは、出発点に戻らないといけないということ。片道ルートを開発すると、車の利用者がぐんと減るので、何とかして開発できないか。
・例えば、八草を出発して山口へ抜けるというような、ある程度ぐるっと回るコースができる、やはりぐんと公共交通機関の利用者が増えると思う。

事務局

・今、連携の話がありましたが、瀬戸市も天水皿の所の整備を来年度やっていかれるということなので、今後、瀬戸市にもいろいろご相談をしながら考えていきたいと思う。
・片道ルートという話があったが、今でもセンターに来られて、片道で行かれるという方もおられるようなので、そういったことも考えていきたいと思う。そういった面で、標識等の整備も今後進めていきたいと思っている。

委員

・今の陶磁資料館と天水皿センター、それから海上とか。八草はどうしてもあまり自然が豊かでないところを通ってしまうので、意外と起点としては陶磁資料館南駅のほうが良いかもしれない。

委員

・一般ハイカーや自然観察者の流入には環境負荷の面で問題もあると考える。センターや森の会には、自分たちがイベントで引き込んだ人々の行動の結果の自己責任も意識していただきたい。会に入っている地権者と入っていない地権者を差別することなく公平に接してほしい。文句があるなら会に入れの論理は受け入れがたい。自由な討議が許される会に成長してほしい。今まで私たちの住んでいた海上と違った海上ができつつあるのではないかと危惧している。今後もウカの様押し寄せるであろう人間達に海上の里は悲鳴をあげてしまう。車も多い。私たちはコントロールの利かない変化がイベント後に起きるのではないかと心配している。

・万博の前は本当に静かな理想郷だった。あの万博前の40年間の海上を思うと万博騒動の20年はつらいものがある。海上の代表を名乗る多くの組織と人々があつという間に現れたり消えたりしていった。この流れには評価すべき面も多くあるかもしれないがイベントばかりみせつけられるのは疲れる。海上の人間関係もセンターや森の会の方針に賛成する地権者と昔ながらの静かな生活を望む住民地権者とに意識が二極分解し、あんなにも仲が良かった人間関係が消えたということが起きないことを祈る。会話も途絶えたままだということでは里の共同体と

してはやっていけない。

・イベントも度を超すと動植物に被害が出ると思う。またマウンテンバイクやオフロードオートバイの問題も解決していない。みなさんにもお願いしたい。こういう嫌みな部分は本来学者文化人が鋭い感性で発言していただきたい。生活負荷と環境負荷の現状には海上の代表を名乗るすべての部外者組織の現地調査を共同であることを呼びかけたい。良いことも苦しいことも共有していただけると互いに同じような気持ちになる。

委員

・活動が活発になっていくことは良いことだと思うが、外から眺めていて一番わかりにくいのは、どんどん活動が外へ出て行って、「この森をどうするのか」という話だけが一番最後まで残ってしまっている。

・森林育成事業であれ、自然環境保全であれ、具体的にどうしていくかということを時系列的に示せるようなものを早く作らないといけない。まだ漠然としていて、そこが見えていないと思う。

・会合を持ったり、議論したりするとか、そういう所に力を入れてやっていくということがなかなか見えてこないものだから、海上の森センターとは何だろうというふうについつい思われてしまうと思う。そういうことについて、私どもは大変答えにくい状況になっているので、本筋はそこにあるということを示していただきたい。

委員

・長期間ここの計画を続けていくということを考えるなら、学術的なデータがきちんと取れているということが将来ものを言う。未来永劫に続けていくぐらいのつもりでやって、そのデータをちゃんと持っていることで、いろいろなことに対して偉そうに言える。

・私は、イギリスの農業試験場を見に行った時に、同地点の調査を130年間毎年繰り返しているのを見て感銘を受けました。そこまでいくと大げさかもしれないが、モニタリングをきちんとやっていくということは非常に大切。

・愛知県は昭和50年代に、日本で先駆けて環境指標林をこしらえた。熱田神宮を中心にして南北に7ヶ所の観測点をこしらえてやって、その後、確か23ヶ所に拡大して全県にある。このごろは話を聞いたことがないが、あれはどうなったのでしょうか。

委員

・そんなものがあることを知りませんでした。

委員

・熱田神宮のところに環境指標林と立派な看板があったが、いつの間にやらすぼまってしまって、そのうちに話もなくなって。やはりきちんとしたデータを持っているということは、本当に偉そうに後々言える。

・湿地があることが愛知県の特徴で、これは遷移がすごく早い。森林の調査区は何年に1回ぐらいの調査でことは足りるかもしれないが、湿地は遷移のスピードがものすごく早いので、湿

地を残していくのか、あるいは、自然の姿だから遷移のままで良いのか、どちらかにするとしても、観測だけはきちんとする必要がある。

- ・せっかくこの大計画をやるなら、目立たなくとも、ベースになる科学的なデータがきちんと積み重なっていくという、モニタリングをぜひとも、しりすぼみにならずに未来永劫続けていくつもりでやってほしい。

委員

- ・毎年自分たちが企画した事業に対して、どの程度応募があって、それで皆さんにどの程度満足していただけたとか、その辺をきちんと反省して、どんどん次の年度の事業計画に反映していくような仕組みがあったほうが良いと思う。見直していくという仕組みを、ぜひ入れていただきたい。

委員

- ・見直していくという仕組みの前に、興味を持ってもらわなくてはいけないと思う。興味を持っている人のすそ野を広げることを考えることが大切だと思う。
- ・好きな人は、好きで自然に集まってくるもので良いのだが、そうでない人たちをどうやって集めるか。20代、30代というのはアンケートの結果でも大変少ないので、そういった方々が参加できるような環境を作りあげていくことが大切になってくると思うので、そういった意味で、企業の連携というのはすごく大切かと思う。
- ・せっかく大学を作るということになると、その方々が興味を持ってもらえるようにしていくなど、先ほど言われた計画的にもものを見て長年続けていくことが大事になってくるのかと思う。

座長

- ・いろいろな要望があったが、やはり計画が盛りだくさんで、これを全部ちゃんとやったら大変だとも思う。
- ・今の先生方のご意見を踏まえて重点項目を決めて、きっちりやるべきところは継続して長期にわたってやるというように、めりはりを付けてやっていただけたらなと思う。
- ・時間が来ましたので、これをもちまして本日の会議を終了させていただきたいと思います。ご協力ありがとうございました。

事務局

- ・次回の会議は来年2月ごろ、開催させていただきたいと思いますので、その節はよろしくお願いたします。
- ・本日は長い時間ありがとうございました。これをもちまして終了させていただきます。

閉会